

論文 / 著書情報
Article / Book Information

題目(和文)	都市 commons の再生と「ふるさと感」の共有に関する研究
Title(English)	
著者(和文)	加藤まさみ
Author(English)	Masami Kato
出典(和文)	学位:博士(学術), 学位授与機関:東京工業大学, 報告番号:甲第10384号, 授与年月日:2016年12月31日, 学位の種別:課程博士, 審査員:桑子 敏雄,坂野 達郎,猪原 健弘,伊藤 亜紗,土肥 真人
Citation(English)	Degree:Doctor (Academic), Conferring organization: Tokyo Institute of Technology, Report number:甲第10384号, Conferred date:2016/12/31, Degree Type:Course doctor, Examiner:,,,,
学位種別(和文)	博士論文
Category(English)	Doctoral Thesis
種別(和文)	論文要旨
Type(English)	Summary

論文要旨

THESIS SUMMARY

専攻： Department of	価値システム	専攻	申請学位（専攻分野）： Academic Degree Requested	博士 Doctor of	（ 学 術 ）
学生氏名： Student's Name	加藤まさみ		指導教員（主）： Academic Advisor(main)	桑子敏雄	
			指導教員（副）： Academic Advisor(sub)		

要旨（和文 2000 字程度）

Thesis Summary (approx.2000 Japanese Characters)

本論文の目的は、「都市に暮らす市民が生態系を含む環境問題を自らの問題と捉え、かつ自らの意思に基づいて問題解決の当事者として活動することは如何にして可能か」という問いに答えることである。本論文は、この問いに「都市の市民がコモンズの再生、すなわち生態系を含む環境問題の解決に当事者として活動に関わることは、公園、緑地、河川などコモンズ空間の自然再生活動と、「ふるさと感（センス・オブ・ホーム・プレース）」すなわち「自己の存在と土地との間の親密な感覚」の認識および多様な人びととの共有を統合することによって可能である」という答えを導いた。

序章では、本論文の目的と背景、先行研究、論文の構成と研究の方法を示した。

第1章「東京の都市河川に見るコモンズの衰退と再生」では、都市コモンズの問題について論じるために河川法改正以降日本各地で成果を上げている市民参加の川づくりを本論文の導入部とした。東京の善福寺川での実践を通して、都市河川が都市の市民にとって、自然の一部であった河川を社会資本の一部に組み込んできた流域全体の土地利用の問題を認識する場であることを明らかにした。

第2章「コモンズの衰退と「ふるさと感」の喪失」では、東京の河川の問題が明治維新以降の都市の西洋的近代化と拡大に起因し、結果として生物生成の要である基底善のコモンズ（土壌・水・大気・陽光）までが衰退していることを示した。人工的都市環境は人びとの自己の存在と土地との間の親密な感覚、すなわち「ふるさと感」を喪失させている一方で、子どもたちは清掃活動や調査にかかわることで劣悪な河川環境に親密感を見出していることから、都市における「ふるさと」概念の再検討の必要性を指摘した。

第3章「E. カレンバックの「エコトピア」概念への着目」では、「ふるさと」概念を再検討するために資源循環型社会を小説で示したカレンバックのホーム・プレースとしての「エコトピア」概念と「環境のユートピア」として用いられている「エコトピア」の違い、および彼の「エコトピア」概念とユートピア思想、ユートピア的世界観の相違を明らかにした。

第4章「「ホーム・プレース」としてのカレンバックの「エコトピア」」では、まず、カレンバックの小説執筆の契機となったユートピア的世界観を背景にもつアメリカ近代工業化社会を俯瞰した。次いで彼の「エコトピア」概念から持続可能な都市社会を導く4要素、すなわち、「有機資源の循環に基づく「安定状態（ステイブル・ステート）」、人びとと土地との間の親密感を表す「センス・オブ・ホーム・プレース」、環境容量を規定する「バイオリジョン」、「アーバン・エコロジー」の各概念を抽出した。

第5章「都市の危機克服プロセスにおける市民活動とセンス・オブ・ホーム・プレースの関係」では、オレゴン州ポートランド市が1960年代のモータリゼーションに起因する「都市の危機」を市民活動とリーダーシップで成長管理政策と中心市街地のコモンズ再生を通して克服した経緯と、その後の土地保全制度と市民参加システムの整備、さらに気候変動に如何に対応しているかを概観した。最後に同市の実践とホーム・プレースとしての「エコトピア」の4要素との類似性の存在を明らかにした。

第6章「神田川流域の土地利用とコモンズ空間」では、はじめに地方分権（2000年）以降の都市計画法制度の変化と課題を整理してコモンズ空間の保全にしている土地利用の傾向を概観した。次いで「文京区立元町公園」の保存運動と「杉並区立蚕糸の森公園」の創生と保全の事例を分析し、コモンズの課題を克服しうる地域では、市民活動の重層的ネットワークと人びとのふるさと感の共有が存在することを明らかにした。

第7章「ふるさと感と市民参加の形態」では、6章までの議論を基に「ふるさと感（センス・オブ・ホーム・プレース）」の構成要素と土地との関係、オレゴン州とわが国の土地政策を比較検討したのち、課題を克服する地域の「市民参加の形態」と「都市システム」の関係モデル化した。

第8章「東京におけるコモンズの再生」では、実践的研究を通して「多自然川づくり」における市民参加とふるさと感の共有を導く「ふるさと見分け」の手法の有効性を確認し、最後に「ホーム・プレースとしてのエコトピア」の4要素を応用して流域に適したコモンズ再生の提案をした。

終章では、結論と今後の課題を示した。すなわち本論文は、市民の自然再生活動を通して都市の環境問題を整理し、近代的都市政策が「基底善のコモンズ」の劣化を招いており、それらの修復には土地利用のあり方の再考を必要とすること、「ホーム・プレースとしてのエコトピア」の概念が環境共生社会の構築の指針となることを明らかにして、「都市市民が当事者としてコモンズ再生に関わることは、人びとのふるさと感の共有とコモンズ空間の自然再生活動への参加を統合することによって可能である」と論じた。

備考：論文要旨は、和文 2000 字と英文 300 語を 1 部ずつ提出するか、もしくは英文 800 語を 1 部提出してください。

Note：Thesis Summary should be submitted in either a copy of 2000 Japanese Characters and 300 Words (English) or 1copy of 800 Words (English).

注意：論文要旨は、東工大リサーチリポジトリ (T2R2) にてインターネット公表されますので、公表可能な範囲の内容で作成してください。

Attention: Thesis Summary will be published on Tokyo Tech Research Repository Website (T2R2).

論文要旨

THESIS SUMMARY

専攻： 価値システム 専攻
Department of
学生氏名： 加藤まさみ
Student's Name

申請学位(専攻分野)： 博士 (学術)
Academic Degree Requested Doctor of
指導教員(主)： 桑子敏雄
Academic Advisor(main)
指導教員(副)：
Academic Advisor(sub)

要旨(英文 300 語程度)
Thesis Summary (approx.300 English Words)

The purpose of this dissertation is to answer the question: is it possible for urban dwellers to act on their own accord to resolve the decline of the urban commons by taking on the issues as their own personal problem or challenge.

The study is composed of the following 4 section and 10 chapters.

First, the study introduces the field study method “method for finding a home place” to lead people to develop a sense of home place and to realize the degradation of the urban ecology around them through the restoration activities of urban rivers. The field study clarified that the cultural landscapes of urban rivers are the results of problems associated with the urbanization of Tokyo, which has been influenced by a utopian worldview, the core value of occidental modernization. This even causes the deterioration of “the commons of basic needs for living such as soil, water, air, and sunlight” and it leads us to the conviction that a reexamination of a sense of home place in urban areas is necessary.

Second, a perusal of Callenbach's Ecotopia distinguishes his approach with a utopian worldview so that his four key factors of stable state, home place, bioregion, and urban ecology are extracted. These factors play a vital role in the construction of a sustainable urban region.

Third, by using case studies to analyze the regeneration of the urban commons in Portland, Oregon and in Tokyo, we better understand and are able to extract the key factors enabling successful results. These case studies illustrate how diverse citizen activities can organically form multiple layered and intertwined networks that strengthen local communities.

After examining all of the above, the study arrives at the conclusion that the regeneration of the urban commons by urban dwellers is possible when the recognition and sharing of the sense of home place by various participants with high motives is combined with the restoration activities of commons space such as parks, green fields and rivers.

備考：論文要旨は、和文 2000 字と英文 300 語を 1 部ずつ提出するか、もしくは英文 800 語を 1 部提出してください。

Note：Thesis Summary should be submitted in either a copy of 2000 Japanese Characters and 300 Words (English) or 1copy of 800 Words (English).

注意：論文要旨は、東工大リサーチリポジトリ(T2R2)にてインターネット公表されますので、公表可能な範囲の内容で作成してください。
Attention: Thesis Summary will be published on Tokyo Tech Research Repository Website (T2R2).